

～地域貢献活動から社会課題の解決・社会参画へ～

少年院在院者の 地域貢献プロジェクト

全国初！少年院在院者による
ボランティア団体

阪南市の少年院①「泉南学寮」の在院者を中心とした「泉南学寮グリーンサポーター」が、地域のボランティア団体として阪南市社協に登録。

ボランティア団体登録の認定式では、市長らが出席し、メンバーの代表から「非行をして迷惑をかけたが、少しでも人の役に立てるよう活動したい」と決意が述べられました。

自分たちが地域の担い手に

泉南学寮は、非行傾向等の問題性が単純または比較的軽く、早期改善の可能性が大きい少年が在院する第1種少年院で、在院期間は5カ月程度。院内で行われるプログラムに、ボランティアをテーマとした時間が組み込まれ、そこに市社協が参画しています。

まず、自分たちの地域にはさまざまな困りごとがあることや、市内で活動

する「子ども福祉委員」②など世代の近い子どもたちの取り組みや思いを学びました。その中で市社協の佐藤萌香さんは、「誰かから受けた恩を、直接その人に返すのではなく別の人に送ることで、社会全体に恩送りの連鎖が起る」と話しました。

その後、「自分たちができることやしてみたいこと」をテーマにグループワークを行い、高齢者や不登校生徒との交流、地域の清掃など、さまざまな声があがりました。

活動に向けて、どんなことができるのかを一覧にしたチラシを手書きで作成。

「力も元気もあるので、ぜひお声がけください」とのメッセージとともに依頼者の元に届けられました。

院内での学習などに関わった市社協の佐藤さんは「私が関わる中で感じたのは、彼らにも可能性は無限大だということ。話しあいの中で自らを振り返り、チャレンジしたいこと

が多く出された時の感激は忘れられない。彼らのパワーを存分に発揮できるような場を創り、想いと想いをつなげていきたい」と話しました。

役に立てる喜びを実感

活動内容は、市社協や地域包括支援センターに寄せられた地域の困りごとを市社協職員がマッチングしています。はじめの活動は、地域活性化に取り組む地元漁業のカキ小屋のお手伝い。漁業組合では、高齢化や担い手確保に関する課題を抱えています。地元の漁師に見守られながら、メンバーの3人が水揚げされた養殖のカキを網から一つひとつ正しい取りはずし、選別す



民生委員でもある漁師からの紹介で、活動を受け入れていただきました

る作業を行いました。

漁師から「若くて飲み込みが早い。手際がよくて助かる」と感謝の言葉がかけられ、人の役に立てる喜びを実感しました。

2回目の活動では、グループワークで出していたアイデアを採用して、ひとり暮らし高齢者宅の清掃を行いました。

福祉委員や民生委員児童委員とともに活動している最中、あるメンバーが古いバスケットボールを発見。「どなたかバスケットボールをされていたのか」と声をかけると、依頼者は「息子が部活で使っていた思い出の品。懐かしい。これは保管しておきたい」と笑顔を見せました。淡々と分別・廃棄するのではなく、ボランティアならではの依頼者の思いや立場に寄り添った活動をするのが魅力です。

気恥ずかしいけれど、続けたい

活動を終えたふりかえりでは、「些細なことでも感謝された。1日でこんなにありがとうと言われたことはない。気恥ずかしいけれど、これからもボランティアを続けたい」と話しました。

依頼者はメンバーたちに「人にしたことは必ず自分に返ってくる。今日私たちを幸せしてくれたみなさんにはこ

隅々まで率先して片付けます



一人ひとりが大切な存在

これから幸せが訪れる。今後もお互いが幸せになれるようにボランティア活動を続けてもらいたい」と励ましの言葉をかけました。

ともに活動した市社協の吉川宗秀（としひで）さんは、「清掃活動や力仕事を一生懸命頑張ってくれた。若い世代の活躍は、阪南市としても心強いもの。地域住民も一緒に汗をかいてくれ、これからも地域ぐるみで応援していきたい」と意気込みを語りました。

在院者は、家庭環境に複雑な事情を抱え、自己肯定感が低いケースが少なくありません。しかし、泉南学寮グリーンサポーターの活動を通して地域住民

と交流し感

謝の言葉を

かけられ、達

成感ややり

がいを感じ、

自分に自信

をもつつか

けが生まれ

ています。

仮退院し

たメンバー

の一人は、

地元に戻っ

ても地域を

支えるボラ

ンティア活動

を希望し、自

主的に地元

社協を訪れま

した。在院中

のメンバーた

ちからも出

院後、地域の

地域で活動し

たいとの声があ

がつており、

市社協が仮

退院者の地元

社協訪問を仲

介するなど

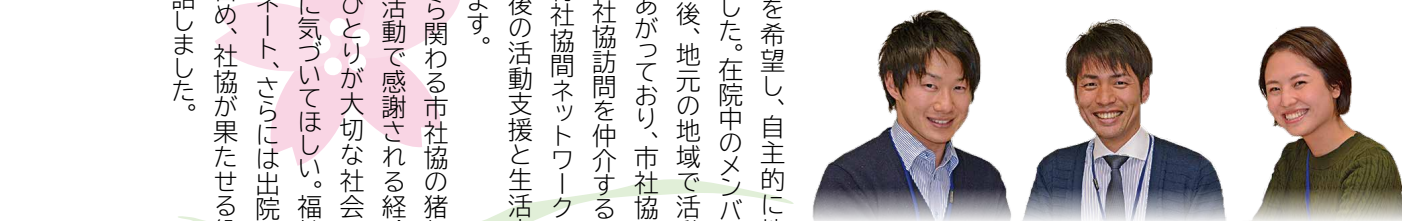
府内の市町村

社協間ネット

ワークを活

用して、出

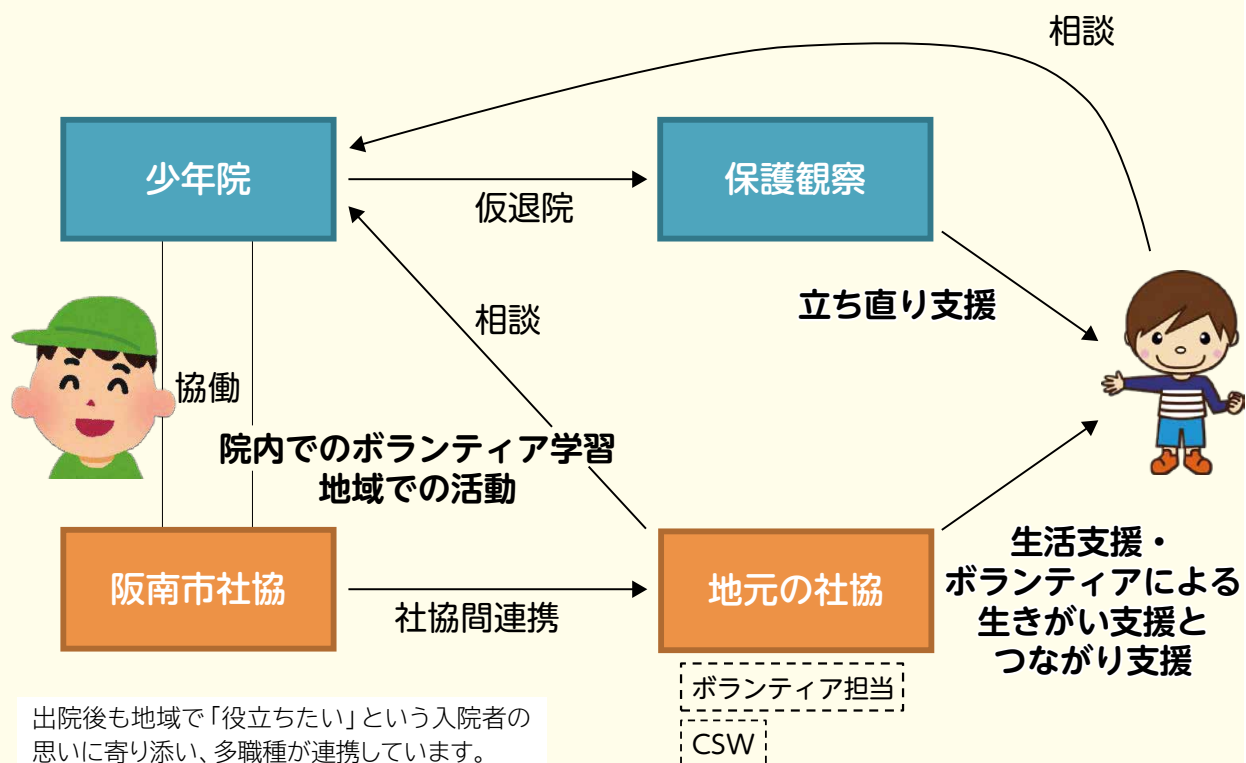
院後の活動



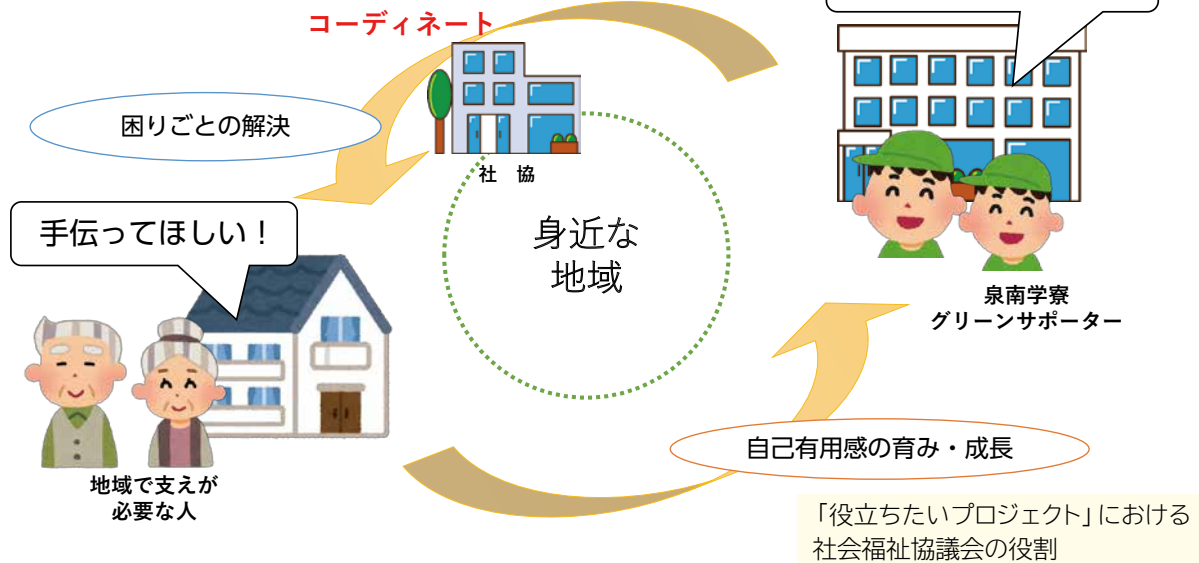
左から、吉川さん、猪俣さん、佐藤さん

立ちあげから関わる市社協の猪俣健一さんは、「活動で感謝される経験を通して、一人ひとりが大切な社会の一員であることに気づいてほしい。福祉学習やコーディネート、さらには出院後の生活支援も含め、社協が果たせる役割は大きい」と話しました。

R2年1月～ 3人が仮退院 すすめる連携体制



「役立ちたい」プロジェクトの考え方



詳しくは「ひろば」



子ども福祉委員

小中学生が地域活動の担い手として、高齢者宅のお手伝いや地域イベントの企画などを行っています。

少年院

非行少年が社会復帰するための矯正施設。法務省の所管。犯罪傾向が進んでいない第1種、非行傾向が進んだ第2種、障がいのある人の第3種、少年受刑者を収容する第4種に分類。生活指導や、基礎学力を身につける教科指導、パソコン実習などの職業指導を行っています。

地域貢献活動を通じ、少子高齢化が進む地域の課題解決につなげ、さらには在院者の社会参画の意欲を高める効果が期待されています。

このプロジェクトは、民間企業や団体、大学関係者と地域課題解決のアイデアを出しあう中で法務教官から発案され、法務省「役立ちたい」検討プロジェクト会議モデルケース」として実施しています。

全国に広がるモデルケースへ

もったいない！ 食材を有効活用！ フードバンク高石

食品ロスの解消や子どもの居場所づくりを支援するため、高石市社協と㈱関西スーパーマーケットは、1月20日に「食材提供に関する協定」を締結しました。

きっかけは、食品ロス削減・社会貢献活動に取り組まれている関西スーパーマーケットに、高石市社協がフードバンク事業への協力を呼びかけたことから。

両者は2月28日からフードバンク高石を開始。関西スーパーマーケット高石駅前店から寄付された品質には全く問題がないものの、市場には流通できなくなった食材は、高石市内の子ども食堂やコミュニティカフェの運営団体をはじめ、福祉施設などで活用されます。



締結式には、市内で子ども食堂を運営する7団体が出席しました

ありがとうございました

寄付額 **「197,800 円」** We support



寄付つき商品「OSAKA ボランティア手帳」が、今年度も好評のうちに完売しました。

宣伝で目にしたキャッチコピー「まずは手帳からボランティア」は、ボランティアさんから“ボランティア未体験の人”へのメッセージ。

今回は、その想いととも府内の多くの方に頒布されました。購入額の内1冊10円が赤い羽根共同募

金に寄付されます。一人ひとりのあたたかい気もちが集まり、府内の社会福祉の振興に役立てられます。ありがとうございました。

